

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012年11月27日

派遣者氏名（専門分野）	クドヤーロワ・タチアーナ（日本語学専門）
-------------	----------------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	英国コーパス言語学におけるヴァリエーション研究・語彙意味論研究の現状と最新成果に関する調査研究—略語使用と関連して—
-------	--

派遣期間 24年08月30日 ～ 24年10月30日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	イギリス	ロンドン	SOAS（ロンドン大学）	Lutz Marten
	イギリス	バーミンガム	バーミンガム大学 CARE センター	Michelle Devereux
	イギリス	ブリストル	ブリストル言語学センター	Patrick Hanks

派遣先で実施した研究内容

本派遣の目的は、申請者が現在行っている、現代日本語の略語使用の研究をより高度なものにするには、コーパスを用いた言語使用、とくに、略語と原語のようにヴァリエーションの関係にある形式の使用に関する調査法、および、単語のカテゴリ的意味に関するコーパス意味論的な研究を深化することであった。そのため、派遣者は訪問機関において以下のような研究活動を行った。

1. イギリスの大学は9月末までが夏休みの期間であり、図書館がより利用されやすい、という SOAS のスタッフの説明に従って、8月30日にロンドンに到着後、すぐ、日本語についての資料が貯蔵されている SOAS 附属図書館を利用し始めた。

2. 9月13日にロンドンを出発し、バーミンガム（バーミンガム大学）に移動した。バーミンガム大学（CARE センター）では、BANK OF ENGLISH の英語コーパスへのアクセス許可をもらい、休み期間を利用して英語の略語の使用実態が分かるような実例などを BANK OF ENGLISH から拾っていた。バーミンガム大学附属図書館は、一般言語学、そして英語学についての資料が多く収蔵されている。英語の略語はどんなものを研究対象に取ればよいか、コーパスからはどんなものを拾えばよいか、また、日本語との対照研究はどの観点からすればよいか、について分かるため、多くの時間をさき、英語の形態論・造語法・略語使用についての本も閲覧した。

3. イギリスにいる間、COLLINS 辞書の編集者であった、有名な言語学者である Patrick Hanks とも連絡を取った。P. Hanks が現在所属しているのはブリストル言語学センターである。9月15日-16日に P. Hanks に会いにブリストルに行って、派遣者が行っている研究の意義、今後の見通し、進め方、英語との対照研究の妥当性、投稿論文の可能性などについて相談した。P. Hanks によると、イギリス言語学では、日本語の略語

や、英語の略語使用についてもほとんど触れられておらず、略語研究及び日本語との対照研究はイギリス言語学、そして一般にヨーロッパ言語学にとって非常に重要である。そこで、それはどのように活かしたらよいかについても相談した。英語の造語論・意味論や英語における単語短縮の特徴について話す中で、日本語との対照研究の対象として、英語だけではなく、単語の複合化と省略が盛んに行われるドイツ語も入れるべきだ、というコメントを頂いた。

4. ブリストルからバーミンガムに戻った後、有名なコーパス言語学者であり、BANK OF ENGLISH コーパスの作成者の一人であった、現在バーミンガムに住んでいる Ramesh Krishnamurthy にも連絡をし、アポイントメントが取れた。9月21日に始めて会って、英語における略語使用実態、日本語との共通点・相違点、コーパスの応用、研究資料の絞り方、研究へのアプローチなどについて色々コメントを頂いた。R. Krishnamurthy とその後も、何回か連絡を取り合って、派遣者が準備した博士論文の英語要旨を呼んでもらって、研究の精密化・今後の展開についてフィードバックをしてもらい、一番疑問に思っていたいくつかの点についても大事なコメントを頂いた。それとは別に、イギリスにおける英語のヴァリエーション研究についても話した。

一般の授業とは別に、CARE センターで毎週行われる、研究発表・ディスカッションを目的とする、大学院生向けのゼミにも参加し、バーミンガム大学 CARE センターで行われる、英語コーパスにもとづく研究についての発表を聞いた。

10月01日から授業が始まり、社会学、ディスコース・文化・コミュニケーションの授業にも、略語の使用状況にも関係していると思われるので、参加した。

5. 10月10日にバーミンガムを出発し、ロンドン (SOAS) に戻ってきた。SOAS も学期が始まったので、形態論、意味論の授業に参加した。また、略語使用の研究 (特に、多言語間の比較) は、翻訳学の理論が役に立つだろう、というアドバイスを R. Krishnamurthy から頂いたので、翻訳学の講義にも出た。

6. 10月12日には、派遣者が会員であるイギリスの Philological Society の会がロンドンで開かれ、それに参加した。Philological Society のメンバーは、主に、ヨーロッパ言語の、対象期間がよく何百年に渡る、という通時的な研究を行っているが、ヴァリエーションの研究、そして通時的調査としての方法は、日本語の研究にも応用できると思われる。その会でも、派遣者が行っている研究について、主催者たちと話し、ヴァリエーション研究の特徴、略語使用パターンの出し方・まとめかたなどについて大事なコメントを頂いた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本派遣の目的は、コーパスを用いた言語使用、特に、略語と原語のようにヴァリエーションの関係にある形式の使用に関する調査法、および、単語のカテゴリー的意味に関するコーパス意味論的な研究の深化であった。そこで、派遣者は、イギリス滞在中、訪問機関において研究活動を行って、以下のような成果ができた。

SOAS (ロンドン大学) 附属図書館には現代日本語に関する研究資料が多く収蔵されている一方、バーミンガム大学附属図書館は、予想していた通り、英語言語学、形態論、コーパス言語学に関する資料が多い。派遣者は、滞在中、多くの論文を閲覧し、その中では、英語の造語法、コーパス言語学的研究、ヴァリエーション研究、意味論などについての、20冊以上の論文から、自分の研究に適用できると思われる章もスキャンした。

バーミンガム大学コーパス言語学センターで利用できる BANK OF ENGLISH コーパスは、種々のレジスターのテキストが通時的データとして収録されているので、ヴァリエーション関係にある 20 対 (英語の原語と略語のペア) の全ての使用例を集めた。イギリス滞在中、英語における省略について専門家と話したところ、

英語に見られる短縮はそもそも日本語と異なる現象であることが分かった。即ち、盛んに行われるのは、比喩や転成としての短縮であって、日本語に見られるような、単語の一部を省く省略はそれほど一般的ではないのである。しかし、英語コーパスを見たところ、普通の略語に相当する項目も数多く存在し、それぞれの原語とヴァリエーション関係をなしている。その中で、特に興味を引くのが、日本語の対「携帯電話＝携帯」の使用状況とも比較できると思われる「cell phone - cell」と「mobile phone - mobile」の使用実態である。イギリスで集めたデータをレジスター別に処理し、比較調査を検討したい。また、コメントの一つとして頂いたように、上記の日本語と英語の使用例を比較し、翻訳学へ適用する第一歩としたい。

派遣者が R. Krishnamurthy と研究の内容について話し、イギリスの英語だけではなく、アメリカの英語における略語の使用実態について検討することが有意義であるというコメントを頂き、R. Krishnamurthy が紹介して下さった COCA という米英語のコーパスも利用し、略語の使用例（通時的データ）を集めた。今後は、日本語との比較研究に適用したい。

もともと訪問を予定していたランカスター大学の UCREL センターへは、そのセンターの都合上で行けなかった。

派遣後の研究発表の予定

日本語学会 2013 年度春季大会